学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	小島　明子 【比較社会文化学専攻　平成20年度生】	本論文は清末から民国初年にかけて活躍し、近代的批評の先駆けとなったと評価される王国維（1877～1927）の青年期に焦点を当て、王の経歴、彼が関わった雑誌『教育世界』の編集・出版をめぐる状況、従来より王の文学を考える上でキーワードとされてきた「人間」の語の意味等について再検討し、中国文学における古典と近代の継承と断絶の問題、中国文人における政治と文学の問題等について考察したものである。 論文本文は全 5 章からなり、資料編として、「『教育世界』未詳記事目録」「王国維詩詞における「人間」の全用例」等を付す。第一章では、王国維に関する先行研究と王の経歴をまとめ、青年期の活動の問題点、「人間」の語の問題性を提起する。第二章は王が編集に深く関わったとされてきた『教育世界』を収録記事の出典調査、伝記との照合の作業を通じて、王が編集にあたったとされてきた時期に、王が上海にいなかったことを明らかにし、同時に、これまで知られていなかった辻武雄なる人物が清末における日本近代教育学受容に深く関与していたことを明らかにした。第三章は「人間」の語が中国古典においてどのように用いられてきたかを詳細に述べる。第四章では、前章を踏まえて、王の著作とりわけ詩詞における「人間」の用法を論じ、そこに見える王の死生観は文学観を論ずる。第五章では、青年期に著した文学論と詩詞を比較して、王における詞の意味、王における文学と政治の問題等について論ずる。「おわりに」において、本文の論述をまとめた上で、王国維の伝統性と近代性を論じ、「一人の文学者の中にも近代性と古典性が共存し葛藤して」おり、王の文学的営為が古典から近代に移行する当時の文化状況の反映であったと結論づける。
論 文 題 目	青年期王国維の文学的営為と清末雑誌『教育世界』 ―「人間」とその背景をめぐって―	
審 査 委 員	（主査）　教授　宮尾　正樹	
	教授　伊藤　美重子	
	教授　浅田　徹	
	教授　岸本　美緒	
	准教授　伊藤　さとみ	